

## 「真珠採り」の態度——ハイデガー、ベンヤミン、アーレント

青木崇

### 【要旨】

その作品を少しでも読んだことのある者なら誰にとっても、アーレントが西洋古典の広大な見識とともに議論を展開していることは明らかであろう。ただし、その論調はしばしば、ポリスの復権を目論む単なる懐古趣味として不当に論難されてきた。その単なる懐古趣味と見做される側面は注目されても、伝統や歴史に対するアーレントの思索態度はほとんど看過されてきたのであり、ある程度は未だにそうである。一方、80年代から90年代にかけて、西洋の伝統に対するアーレントの独特な態度がその思索に深く浸透するものとして注目され、またこの態度からその政治哲学が読み直されるようになった。この態度は、アーレント自身によってハイデガーの「解体」やベンヤミンの「歴史の天使」と重ねられつつ、「真珠採り」の態度と比喩的に表現されるが、その内実についてはこれまで十分に検討されていない。先駆的な研究としては、デイナ・ヴィラによる『アーレントとハイデガー：政治的なものの運命』(1996)があり、これを受けてシェイラ・ベンハビブも“The Reluctant Modernism of Hannah Arendt”(1996=2003)において独自の議論を展開した。近年では、ロドルフ・ガシェが『脱構築の力』(2020. アーレント論を含む諸論考を宮崎裕助らが編訳)において、ハイデガーの「解体」との近さを示唆し、ヴィラも「アーレントとハイデガー、そして西洋哲学の伝統」(『Heidegger-Forum』第十四号, 2019=2020)でこの点を強調しながら自らの解釈を再論している。また、柿木伸之による「抑圧された者たちの伝統とは何か——ベンヤミンの歴史哲学における歴史の構成と伝統」(『思想』1131号, 2018)も、ハイデガーとアーレントに目を配る重要な研究である。

本研究の課題は、以上のような研究状況を背景にしつつ、以下2つの視座からアーレントにおける「真珠採り」の態度について究明することである。

第一に、森一郎が『ポリスへの愛——アーレントと政治哲学の可能性』(2020)で指摘するように、アーレントは、伝統の中で忘却されている思想や経験の断片に対するハイデガーとベンヤミンの態度を近づけて理解する。「それと気付くことなく、ベンヤミンは実際、マルクス主義の友人たちの弁証法的な狡猾さよりも、海神の力によって真珠や珊瑚に変貌した生きた目や生きた骨に対するハイデガーの驚くべき感覚とより共通するものを持っていた」(*Men in Dark Times*, 201)。アーレントはその上で、両者の態度に自らの態度を重ねて「真珠採り」と表現するのである。それゆえ、本稿の課題を遂行するには、アーレントがなぜ、またどのように両者を近づけているかを明らかにすることが不可欠である。

第二に、本稿の課題には文献上の難しさがある。「真珠採り」の態度に関する直接的な言及は、晩年に近い時期の著『暗い時代の人々』(1968)に収められたベンヤミン論に集中しており、典拠としてもそれほど多くない。ただし、同様の態度は、ハイデガー論でもある「近年のヨーロッパ哲学思想における政治への関心」(1954)にまで遡ることができ、最晩年の『精神の生活』(1978)では自らの態度がハイデガーの「解体」に学んだものであると振り返っている。「ギリシアの初めから今日に至るまで見知ってきたような形而上学や哲学をその範疇ともども解体することをしばらく前から試みてきた者たちの仲間に、私が属してきたことは明らかである。そうした解体が可能なのは、伝統の糸が途切れ、我々は決してそれを新たに結び直せないだろうと想定する限りのことである」(*The Life of the Mind*, 212)。このように、直接「真珠採り」と表現されるわけではないにせよ、その態度に関する論述はアーレントの作品の随所に散見される。本研究では、そうした論述を整理しつつ、最終的に『過去と未来の間』(1961, 1968)——とりわけ「歴史の概念」や「文化の危機」という論考——を、過去や伝統に対するアーレント自身の態度をめぐる思索として読み直し、その内実を明らかにする。

ハイデガーの「解体」とベンヤミンの「歴史の天使」の間で、アーレントはいかにして過去や伝統と対峙したのだろうか。現在、古典や人文学は、度重なる社会的、政治的な不安定さの中で世間の注目を集め直しているが、不安の解消やその場凌ぎの娯楽として消費されてしまう危険に晒されてもいる。こうした状況にあって、「真珠採り」の態度は、我々自身が過去や伝統とともに思考を紡ぐことにとっても、有意義な視点を与えてくれるだろう。